体験活動で何を学ぶのか
～他者と交わることで自己肯定感を高める～

体験活動と聞いて、それをイメージできない先生方はいないと思います。それほど体験活動は、学校教育の中に根付いています。また、実際に体験することで多くのことを学ぶことができることも承知していることと思います。

一般的に、体験活動は子どもたちの成長を促し、豊かな人間性を育むための重要な教育活動と言われています。自然体験、社会奉仕、交流活動など、多様な体験を通じて、社会性や人間性を育むことを目的としています。例えば、宿泊研修、職場体験活動、地域探検、ボランティア活動、施設訪問、地域清掃活動、農作物づくり体験、他校との交流活動、異文化体験等、多岐にわたります。

ところで、その目的である“社会性や人間性を育む”ことは、そうたやすくできることではありません。「やらないよりやったほうがいい」という考えもありますが、それは学校教育においては、あまりにも消極的な姿勢と言わざるを得ません。

このことで思い出すのは、西野真由美先生の講演です。先生は当時、国立教育政策研究所の総括研究官をされていて、ボランティア活動の意義について、次のようなことを話されました。

「ボランティア活動の基本は、もちろん社会のために役立つとか、他の人のために役立つということがあるけれど、やっぱり“楽しい”ということがなければダメだと思います。

ボランティア活動の楽しさの基本は、人とのかかわりにあります。あるいは他者とのかかわり、社会とのかかわりです。一番考えてほしいのは、活動に“交流とかかわり”を取り入れることです。

そのうえで、“一緒に生きていく・共に生きていく”ということを、体験を通して教えていくことが、一番大きなねらいであると思います。

ボランティアは楽しいということを学ぶと同時に、ボランティアを通して、子供たちに教えたい価値は“共生”なんだ、“一緒に生きるという価値”なんだということなんです。

そして、ボランティア学習のもう一つ大きな効用といいますか、喜びとしてあるものとして私自身が思っているのは、ボランティア学習を通して、子供たちは自分自身のよさを発見するということです。

やってみると「私っていい子だったのかな」「こんなにいいことが出来るんだな」など、自分のもっている“よさ”が、いろんな人との出会いの中で引き出されていくことがあるのです。自分の ”自尊感情”を育むことができるのです。

これは、実は本当に大きな成果です。自分が何かをやって「ありがとう」と言われたことが、「自分はありがとうと言われることをやったんだなあ」という喜びに変わり、それが一つの楽しさになっていくのです。それこそ、ボランティア体験が与えてくれる本当に秘められた宝だと思うのです。ボランティアは無償性なのだけれども、無償の行為の中で出てくる本当に自分だけにこっそり与えられる報酬だと思います。」

以上のようなお話でした。

日本の子どもたちの“自己肯定感”が低いことはよく知られています。2015 年に国立青少年教育振興機構が行った『高校生の生活と意識に関する調査』で、“自分はダメな人間だと思うことがあるか”という問いに対して、「とてもそう思う」と「まあそ

う思う」と回答した生徒の合計を４か国で比較したところ、日本が72.5%、中国が56.4%、米国が45.1%、韓国が35.2%でした。このことからも、日本の子どもたちの“自己肯定感”は、世界的に見てもとても低いということがわかります。

ではどうしたら“自己肯定感”を高めることができるのでしょうか。それはとても難しい課題であり、先生が「もっと自信を持ちなさい」と声高に言ったとしても、そう簡単に高まるものではありません。ましてや日本人は、大人の“自己肯定感”も低いと言われているのですからたいへんです。

そこで、地域の方々など学校以外の人と一緒に行う体験活動の重要性が増すのだと思います。

そのことを学んだ私は、赴任した学校で、どうしてもそれを実践したくなり、子どもたちの“自己肯定感”を高めるために、それまで生徒だけで行っていた河川清掃を、地域住民の方と一緒にやりましょうと職員会議で提案しました。

ところが、初めはなかなか賛同してもらえませんでした。それは、当時のわが校には、生徒の問題行動がいくつもあり、先生方は生徒が地域の方々と行動を共にすることで、学校が非難を浴びるのではないかと心配していたからです。しかし、私は「だからこそ、やりましょう。必ず子どもたちは変わってくれるはずです」と説得して、とうとうそれが実現しました。

当日は、地域住民の方と一緒に、生徒たちも一生懸命に河川清掃に取り組みました。生徒たちだけで行う普段の活動に比べて、より活気があるように感じました。

この活動を通して、すぐに大きな成果は得られなかったかもしれませんが、生徒たちが、地域の方々の方が、自分たちより何倍もの作業をしている姿を見て、とても驚いていたのを覚えています。それは、生徒たちにとって大きな学びになったと思います。それに加え、地域の方々から褒められたり、声をかけられたりしたことで、うれしいと思った生徒もいたので、私はやってよかったと思いました。それ以後、その校では地域の方々と一緒に行う河川清掃が恒例となりました。

文部科学省では、日本従来の特徴であり、良さでもある“他者との関係の中での自己”としての“自己有用感”、 また“自己評価・自己受容”としての“長所や挑戦心”、 さらに“自己主張・自己決定”としての“主張性”といった意識をバランス良く育み、子どもたちの“自己肯定感”を高めていくことが重要であると言っています。

他者と交わる体験活動は、まさしくこの考えに合致しており、重要な教育活動だといえます。児童生徒の“自己肯定感”が高まっていけば、おのずと自信がつき、主体的な学習態度が育っていくのではないでしょうか。また、ボランティア精神も同時に身に付いていくのではないでしょうか。そんな体験活動が、どの学校においても、活発に行われることを願っています。

（市川三郷町教育長　渡井　渡）